

## 後藤美子論―父を詠み継ぐ北の歌人―

鈴木 竹志

長く札幌の地で歌を詠み続けてきた後藤美子について、あまり語られて来なかったことが残念に思われてならず、まずこれまでに出された五冊の歌集を読んだ。いずれも読み応えがあり、心を揺すぶられる歌集であった。必然的に後藤美子という北の歌人について無性に論を書きたいという衝動が湧いてきたのが、この論の発端である。

五冊の歌集を読み終えて、まず思ったのは、第一歌集『勤め着』（一九七九年九月）に、その後、後藤美子が詠み続けてきた歌の源が間違いなくあるということである。例えば、巻頭近くに次の二首がある。

高瀬舟教ふることはわが仕事父病むことと  
関はりはなし  
父病みて逝きし窓辺をけさも過ぎ生きたる  
われら働きにゆく

ここに詠まれている父親の病気とその後の死去について、後藤はこの歌集の「あとがき」で詳しく語っている。

コスモス入会の年はまた、私の父が、癌の再発で五月に亡くなった年でもありました。母や弟妹よりも早くから、父の死期を知らされていた私は、毎日勤めの往復に、市電の窓から父の入院していた北大病院の病室の窓を見ながら、じっとしていられない気持ちに駆り立てられていました。何も出来ないという無力感と、何かしなくてはという焦りの気持ちで歌を始める直接の動機になったようです。

ここで後藤が率直に語っているのは、短歌を詠むきっかけとなったのが、父親の病気であったということである。死期を知らされていた後藤が、心中の葛藤を克服するために必要としたのが、自己表現のための器である。器はいろいろあったはずだが、後藤が選んだ器は、短歌であった。父の死後五十年以上の歳月を後藤はコスモスに所属し歌を詠み続けているが、それは短歌という器に己を捧げてきたとも言っても過言ではない。繰り返すが、そのきっかけは、父親の病である。後藤にとって、父親は父親以上の存在であったのではないかと思うが、具体的にどのような存在であったかについては、この後述べることになろう。

なお「コスモス」の一九六四年七月号には、「高瀬舟」の歌以外にも二首、父の死に関わる歌が掲載されている。

子ら四人おほしたてつつふみ読むをたのしみとせしわが父は逝く  
ささやかな家たてて母と住まなむと逝く前  
にして父はいひにき

また九月号には、「父病みて」の歌以外にも二首、父の死に関わる歌が掲載されている。

老いかがまり背にて息する老婆すら生きゐるにわが父は逝きたり  
父よりはややに粗末に土盛りて今年の朝顔  
は弟が植う

歌集に載せられた二首に比べて、この四首がさほど劣るものではないと私は思うが、敢えて後藤は歌集には入れなかった。何せ歌集に掲載された一九六四年の歌は八首しかないのであるから、厳選を貫いたと言つてよいであろう。因みに、一九六四年、つまり入会の年に「コスモス」に掲載された歌数は、十七首で、半数以上は歌集に入れなかったのである。

『勤め着』には、父親の死後、つまり一九六五年以降も父親に関わる歌は途切れることなく登場する。

亡き父のスケッチ帳のドクダミの花ははつかにあをき翳持つ  
父の声聞ゆと夢に見て覚めぬ雪解の水の滴りやまず  
父逝きし五月の朝ニクソンの痛とたたかはむ  
声明をきく  
光りつつ柿若葉もゆ死なむ際に見たしと言ひし父の声  
豊後梅咲き満ちにけり父逝きて春七たびをわれら生きゆく  
おのが子の誕生記念に本買ふをならひとなしし父を恋ほしむ  
面あげ吹雪にむきて歩まむはすがしたのし  
と語りき父は  
十年前父が求めしソルジェニーツイン雪降り頻る今宵わが読み  
農学を修めし父の縁もて賜びし新種の米を炊ぎをり  
大いなるロマンとおもふ交配をくりかへしゆく  
育種のわざは  
「小さき者へ」娘らと読みゆく校庭の柳  
青々と父の忌近し

ここに挙げた歌を改めて読んでゆくと、宮柵二門下という言葉を用いたくなるほど、コスモスの正統を貫く歌のありよ

うだどつくづく思う。そして、父への敬愛の念に充ちていることも自ずと知れよう。ただ、後藤の父親がいかなる人物かについては、あまり定かでない。ここまで挙げた歌から推測できるのは、大学で農学を学んだこと、知的好奇心が強くとりわけ文学への関心が深いこと、そして絵心のあることである。後藤の父親について、私たちが詳しく知るのには、第二歌集『釦の詩』を待たねばならない。

一九八九年刊行の『釦の詩』（雁書館）は、三部に分かれている。I部は、一九六四年から一九七九年までの歌で、第一歌集の『勤め着』と重なった時期であるので、当然父親を詠んだ歌は多くない。その多くない歌の中から何首か挙げる。

旅路より父送り来し荷札の字のばして墓に  
彫らむと図る

我の入らぬわが家の墓しみじみと「伊藤家」の文字眺めてぞ立つ

憎みたることなしと我は言はなくに優しき  
父をのみ思ひ出づ

死にゆくはつまらぬといひし父の声雨くだ  
つ夜に覚むれば聞こゆ

「さとぼろ」といふ古き雑誌二十代の父の  
木版画幾葉を載す

五首目の歌に詠まれている「さとぼろ」という雑誌については、この歌集の「あとがき」で触れているので、紹介する。

カバー装画の麦と魚は、五十五年前、わたしが生まれた時に、父が木版で刷り、内祝の品につけたもの、また本扉のドクダミは、作ってもらはずだった蔵書票の下絵です。父伊藤義輝は北大生時代、詩と版画の雑誌「さとぼろ」（大14・6〜昭4・9、全二十九冊刊行）の同人であり、編集者でした。

残念ながら、ここに書かれているのは、「さとぼろ」が大正末期から昭和初期にかけて出された「詩と版画の雑誌」ということだけであり、詳しいことは分からない。

「さとぼろ」という雑誌についてどうにも知りたくて、資料探しに努めたところ、札幌市教育委員会が発行した『札幌・大正の青春』（一九七八年）という本を手に入れることができた。副題には「雑誌『さとぼろ』をめぐる」とある。執筆者は三名。巻頭の「日本に於ける創作版画の運動と雑誌〈さとぼろ〉を中心とする版画活動」という長い題の付けられた長編評論を外山卯三郎が書いている。この評論の第四章から「さとぼろ」についての記述が始まる。かなり詳しく書いてあるので、一部を引用する。

大正十四年（一九二五年）の春休みを終えて、札幌に帰ったわたしは、友人達とこの〈詩と版画〉をモデルとした月刊雑誌を出そうという相談をまとめあげたのです。それが札幌における雑誌〈さとぼろ〉の出發で、この時の同

人が八人で北海道大学の学部と予科の学生、それに予科の先生という毛色の変ったものだったので。雑誌名を（さとぼろ）としたのは、医学部の服部光平君の主張で、バチユラーさんのアイヌ語辞典によると（さととは乾燥するところ）で（ぼろは大きい）、つまり大きな地という意味だということです。このアイヌ語源をとって、（さとぼろ）としたのです。雑誌の形態は、東京の〈詩と版画〉にならうこと、刊行は毎月刊、約四〇ページ、B5版、同人費を各五円とし、最初の同人が相川正義、伊藤秀五郎、伊藤義輝、服部光平、宮井海平、宮沢孝、斉藤護国、外山卯三郎の八人だったのです。

この記述によって、後藤美子の父親伊藤義輝が「さとぼろ」の創刊同人であったことが分かる。

「さとぼろ」についてさらに資料を探し求めていると、平成二十八年に、北海道立文学館で『さとぼろ』発見 大正 昭和・札幌 芸術雑誌にかけた夢」と題する特別展が開かれ、資料集も出されていたことを知り、問い合わせをしたところ、幸い学芸員の方から送っていただけだ。届いた資料集を開いてみると、二十九冊の「さとぼろ」に載せられた版画と詩、短歌、俳句がほとんどすべて掲載されている。しかも、版画については、単色木版と多色木版とあるが、多色木版については、その色を再現している。また『さとぼろ』に関わった人たち」と題する頁が四頁あり、そこには後藤の父親伊藤義輝についても詳しく書かれているので、全文引用する。

伊藤義輝 いうよよしてゐる 1904～1964（明治37～昭和39）年

札幌市生まれ。札幌二中（現西高）から1922（大正11）年、北海道帝国大学（現北大）予科入学。1924（大正13）年、「さとぼろ」のモデルとなった雑誌「詩と版画」に木版画（水門）が掲載され、詩と版画社第一回展に出品。「さとぼろ」創刊同人となり、創作版画の中心的なメンバーとして活躍。第29号を除く毎号、版画や版画についての論考を発表。版画展の開催、制作用具の頒布など、版画の普及にも尽力した。第23号～27号では、編集発行を担当。1927、28（昭和2、3）年には、日本創作版画協会展入選。1928（昭和3）年、同大学農学部農学科卒業以降は、道庁や農林省に勤務し、版画作品の発表からは遠ざかるが、北海道の創作版画最初期において重要な足跡を残した。

この文章を読むと、北大の学生時代の伊藤がいかに真摯に版画に取り組んだかがつぶさに分かる。また才能もあり評価されつつあったが、就職後は、やむなく版画の制作から離れたようである。農林関係の仕事と芸術制作との両立を図ることは極めて厳しかったのであろうと推測される。

さて、『釦の詩』に戻ると、Ⅱ部、Ⅲ部の歌にも当然父親は登場する。

いまさばとなほ折々にしのぶなり梅咲けば  
父の二十年祭

第二人父を知らざる妻を連れ二十年祭の拝  
礼をなす

パソコンもビデオも知らぬ父なりし唐突に  
思ふ墓にむかひて

父の年譜つくらむと古き辞令読むわれら育  
ちし日々を重ねて

三首目の歌に込められている思いは、若き日に版画の制作者として活躍した父なら、パソコンやビデオという新しい機器を利用して、自分の芸術的才能を生かすこともできたのではないかという思いである。四首目の年譜については、さきほど引用した北海道立文学館の発行した資料集の記述に役立てられたのではなからうか。

第三歌集『十年日記』（一九九九年五月 柘書房）になると、さすがに父親の歌はほとんどない。旅行詠、とりわけ海外旅行詠が多い。また、これまでの歌集には、それほど詠まれてこなかったご主人が多く登場するようになった。

母の死を詠んだ一連から紹介する。

しがために母は襦袢を縫ひためて蔵ひおき  
しよ九十三歳まで

月々の「コスモス」に載るわが歌を絆のご  
とく母は読みぬき

父の骨すでに朽ちしや三十年経て母の骨み  
墓に納む

美といふ字わが名に持つを疎みたる若き日  
ありき父母とほし

母親の死は、父親の死後三十年後である。母の死に関わって父親も詠まれているのだが、当然と言うべきか、かつての版画活動に関わる父親を詠んだ歌はこの歌集にはない。しかし、「あとがき」には、この歌集でも、父親の版画活動に関わる記述が見られる。

カバー装画の桃は、ちょうど四十年前私どもの結婚茶話会のために出席者の名札に父が刷ってくれたものです。

本扉には前集と同じ蔵書票の下絵を用いました。

これだけの文章ではあるが、後藤がいかに父親の版画創作に理解と敬愛の念を持っていたかが分かる。特に同じ蔵書票をあえて用いることにその思いがよく表されている。

第四歌集『ゆきぐも茜』（二〇〇九年五月 柘書房）にもやはり父親を詠んだ歌は多くない。実際には四首しかない。しかし、いずれも後藤にとつては、父親の大切な記憶と思いがあからこそ、生まれ出た歌なのであった。

ジャン・マレー逝きたり「マレーエ、コクト  
オ」と父は書きたり杳き日の記憶

洞爺丸に乗りゐし部下の確認に父行ききちやうど五十年前わがへうたのはじめは父の病と死四十年経て忘ることなし父あらばいかが嘆かむ（丸善）が五十余年の店閉づる日を

一首目、父親のメモが意味するのは、俳優のジャン・マレーと詩人のジャン・コクトーとの愛の経緯であろう。三首目の歌は、先に紹介した『勤め着』のあとがきに語られていたことであるが、後藤はそのことを一度たりとも忘れていないと詠むのである。つまりそれほどにも亡き父に寄せる思いが何年経とうとも変わらぬのである。歌人としてこれまで生きてこられたのは、すべて父親のおかげという思いであろう。第五歌集『残果』（二〇一五年六月 青磁社）には、父親が詠まれている歌は次の三首である。

（伊藤）から（後藤）になりて五十年コス  
モス会員歴四十五年

「苗半作」父のことばを思ひ出でミニトマ  
ト二本ていねいに選ぶ

郵送で父が購読してをりき六十年前の東京  
新聞

一首目は、言葉としての父親は出てこない。しかし、これ

まで述べてきたように、後藤のコスモス入会のきっかけはあくまでも父親の病とその死にあるのだから、父親を詠んだ歌とみなしてよいだろう。二首目の歌は、父親が農林関係の仕事をしていたからこそ伝わる言葉を詠んだものである。この歌集の「あとがき」にも父親の版画が登場する。

父が、生前最後にくれた年賀状の版画を口絵にしました。父の没年は五十年前私がコスモスに入会したのと同年。六十歳でした。

なぜかこのあとがきには、この歌集の題名の由来などは一切記していない。しかし、口絵を見て納得する。口絵の左上に「ナナカマド残果」とある。つまり父親の年賀状に書かれた言葉を歌集の題名にしたのである。しかも、あえてその理由は述べなかつたのである。だから、注意深く口絵を見た人には、理解できるが、歌だけを読んでいては、なぜ「残果」なのかは分からない。この第五歌集においても父親への敬愛の念は薄れず、それどころか、歌集の題すらも父親の言葉を借りたのである。

後藤美子のこれまで刊行された五冊の歌集から、父親に關わる歌だけを抜きだして読んできたが、もちろん後藤美子の歌の世界は、これだけに絞られるような狭い世界では決してない。機会を改めて、私は、次に教師として詠み継いだ後藤の歌についても書くつもりである。このことを約束してこの稿を終えたい。